

ホーム・ルームと生徒会との関係強化による

ホーム・ルーム指導の実践研究

岡 本 忠 篤・林 幹 一 郎

ま え が き

「ホーム・ルームとか生徒会など特別教育活動の指導は、ややもすれば教科指導の影におしやられて、陽のあたらず場であることが多い。しかし、それが生徒達の人間形成の上で果す役割の大きさを考え……」（67年度報告まえがき）われわれは昨年度HR研究委員会として未熟な実践を報告した。

それは多くの誤謬に充ちた実践ではあったが、現在の教育の中に見られるいくつかの状況を危機としてとらえることは、誤りではない。

この一年間の付属校をめぐる様々な論議の中で、「付属の危機」という言葉が使われるようになった。どこかの入試にからむ不詳事や、PTA予算で運営されている事実が注目されたから、「危機」というのではない。「危機」は、われわれの日々の教育の中にある。「教育のあり方」にある。「先生方は、教壇で教科について僕たちを指導して下さるが、僕達は、先生方が何を教えようとされているのか、教育という仕事を通して、どのような人間を作ろうと考えておられるのか、教壇での先生方の話からは何一つ理解できません。また、先生方が今の高校の教育をどう考え、将来教師として、現状をどう変革して行こうと考えておられるのか、その具体的な手段も見通しも、今の先生方のお話の中に伺うことが出来ません。……

僕たちは、今自分達が受けている教育に、強い不満を持っています。……」

これは、この秋、教育実習が始まって一週間程たったある日、生徒達が教生に呼びかけた「話し合う会」の訴えである。この生徒達の不満は、殆ど教師たちに語られることはない。「教育のあり方」の前に、「教育があるかないか」を考えることが必要ではないだろうか。「受験体制の中であえて生徒達のために、ここ（H.Rなど特活）に光をあてなければならない。」（67年度報告まえがき）

一年を経ていっそう強く思うことである。

I 研究計画の概要

1. 研究テーマ

『ホーム・ルームと生徒会との関係強化によるホーム・ルームの指導の実践研究』

2. テーマ設定の理由

A 問題の所在

(1) 問題の発見

現在の日本の高校教育の場で生徒たちがとる思考や態度のうちに、放置しがたい人間性のゆがめられた姿が見られる。それは教育基本法の目ざす「真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主精神に充ちた心身ともに健康な国民」への成長はおろか、逆に彼らのおかれた状況の認識を避けようとし、受験以外の学習や、ホーム・ルーム（以下H. Rと略記する）生徒会、クラブ、行事などへの参加には逃避的で無気力になっている。彼らは真実を語れる友を求めつつも現実では互いに不信感と孤立感をつのらせている。そこには「健康な国民」への成長とは逆に「国民の荒廃」への過程を感じさせるものがある。生徒個人の主体性と連帯性の貧弱さ、そして生徒集団の無力さ、これらの危機的状況はなにに起因するのであろうか。

(2) 原因の推測

現在の学校教育は受験体制とよばれる状況におちいつている。それは生徒たちが社会人となったときに予想される生活条件の大きな差別と、それへの不安が結びついて彼らを受験競争にかりたてている。不可避的に迫ってくるこの受験競争への強要こそ、彼らの人間性をゆがめ、教育基本法の精神を阻害する要因ではないだろうか。

(3) 解決の見通し

危機的状況が教育の内外に起因するものとすれば、教師の側からの指導のみによっては十分には解決しえない問題かもしれない。したがって、それは単に教育の問題という領域に限定されるものではなく、社会問題の一表現形態と考えなければならぬ。しかし、われわれは学校教育の中でなしうる可能性を追求しなければならない。したがって、われわれは生徒の「主体性」と「連帯性」とをその「思考と態度」とにおいて深めるための指導方法を追求していこうと考えた。

B テーマ設定の理由

＜主体性＞＜連帯性＞の強化という目標を達成していくために「H. Rと生徒会との関係強化によるH. R活動の活発化」という方法を選んだ理由は

- (1) そのような思考や態度の形態は、教科の学習活動における指導の場でも考えなければならないが、現実的にはH. R、生徒会、クラブなどの特別教育活動における指導の場の方がより直接的に、効果的な指導が行ないうる。
- (2) 本校は伝統的に自由な雰囲気をもっているが、反面H. Rの活動では体験交流のないバラバラな活動が、しかも成果の積み重ねの殆んどない同一点からの出発が年々繰り返えされていた。
- (3) H. Rを活発にするためには、経験交流、成果の積み重ね、身近な問題への取りくみを必要とするが、H. Rの要求を組織的にすることなしにそれはなし得ない。H. Rの要求を実現するためには、個々のH. Rのそれを全校的な規模で統一するような組織、即ち生徒会への結集が必要である。
- (4) また、生徒会活動の活発化はバラバラな個人の関心や参加では保障されずH. R段階での討議で生徒会の問題を全員のものにするところまでいくことを必要とする。

- (5) したがって、H. Rと生徒会との討議の feed-back を盛んにするという組織的活動を通してこそ、主体性、連帯性の強化という目標は、もっとも効果的に達成されと考えて、本テーマを設定した。

3. 研究の目標

教育基本法のかかげる教育が、現実の中でゆがめられ、生徒達が非人間的な学校生活を強いられ、教師の側にもそれに対する無気力な姿勢さえ見られるなかで、この低迷を打破していく一つの手がかりとして、特別教育活動の分野における指導のあり方を検討し、効果的な指導法を確立していきたいと考える。

4. 指導目標

A 指導目標

- ① 生徒の主体性の育成
- ② 生性の連帯感の育成
- ③ 集団としてのまとまりの育成
- ④ 自主規律の育成

「主体性」は単によく話し、行動的であるということだけでなく、自分の置かれた状況をよく認識しており、その認識を土台として、自分がなにをすべきかの目的意識を明確にしていること。その上で、行動的であることをさしている。

「連帯感」は援助と批判によって、自己と他人との鍛えあいを行っていくことの重要性の認識とその行動をさす。

「集団としてのまとまり」とは、まず個々人が様々な要求を出し合い、次いで共通の要求を組織的に統一し、さらに要求を現実達成していく集団の能力をさす。

「自主規律」は集団が要求をほり起こし、組織し、実現していく（その中で個人の要求の達成が保障される）ために必要な規律を自分たちでつくり、守っていくことをさす。

なお、このように個人の集団とのかかわりを重視する立場は、しばしば全体主義と混同されるが、全体主義には「個人の要求のほり起こし」や「共通の要求の統一化」という民主集中の原理が認められていない。

II 実践の概要

昭和42年度 生徒会の記録

1. H. R研究委員会の立場

H. R研委の仕事は、「H. Rと生徒会との関係強化」を実現するため、生徒のH. R委員会構想を生かしていくことであった。この年の4月頃、生徒会役員の間にはH. R委員会構想があった。それはH. R研委の生活指導の方向と基本的に一致するものであった。すなわち、役員たちは、新たにH. R委員会を置くことによって、I、従来ゼロから出発していたH. R活動を、年々の経験の蓄積によって、より高い段階から動きだせるようにすること II、各H. Rの活動が孤立的に行われて来たのにたいし、相互の交流を活発にさせること III、H. Rと生徒会との関係が稀薄だったことにたいし、H. Rの要求を集約し、生徒会に反映させるようにすることを考えていた。この真剣な姿勢——学校生活の中で日々体験している「無気力」や「相互不信」の危機に、自分たち自身で取組もうとしていること、しかも、全生徒をまきこむような組織活動の強化によって打開していこうとしていること——は教師として見すごしてはならないものであった。と同時に、それはH. R研委の目ざすところとも一致していた。かれらはそのような構想を自分たちの間で数カ月間も温めていた。その期間、教師全体にはそのような生徒の動きは把握さ

れていなかった。

H. R 研委の立場は、生徒たちの人間性の回復をめざす闘いとして、H. R 委員会構想を援助していくことにあった。

2. 会則改正

生活指導関係の研究を進めていくためには特活係と協力・調整していくことが必要であり、H. R 研委の一人は特活係が兼任していた。しかし、特活係は中学・高校それぞれの役員会・協議会・その他の委員会などを受けて激職であるため、H. R 研委は調整を充分行うことができなかった。そして、このことが、H. R 研委の仕事にたいする誤解を生みだす大きな契機となった。更に、役員たちのH. R、委員会の設置を中心とする会則改正運動を難航させるきっかけになった。二学期にはいり、教官会議で会則改正問題を最初に審議したとき、それはあらわれた。生徒の意図するところが特活係からの説明では充分伝わらないのではないかと判断したH. R 研委のメンバーが、生徒側の真意は別のところにあるのではないかと正した。後に、それが正しかったことが明らかになると、直接指導する係でないものが「知りすぎている」点に疑惑がわいた。つまり、分掌上の係をさしおいて直接指導を行なったとすれば、その指導には問題があるし、またそのような「筋のちがった」指導による改正運動は認められないという考え方が広がった。このため、審議の中に多大な不信感がまじってしまった。

それは、一面では、H. R 研委が特活係との間に充分な調整をすませておかなかったことに端を発しているが、他面、生徒の要求の受けとめ方にも問題があるように思われる。すなわち筋論をとる見解の中には、生徒の改正の意図を充分理解して、積極的な指導を行おうとするのではなく、逆に、生徒の要求が教師の指導性への挑戦だと受けとった面もあったのではないかということである。こうした受けとめ方に、根拠がないといえるだろうか。H. R 指導にたして学校としての統一的な指導理念がなく、担任がH. R 指導において一国一城の主として君臨していて、自由放任主義的指導が行われている場合には、H. R 間の交流によって、バラバラな指導にたいする生徒の批判が予想される。それを指導への攻撃と怖れる心情ができあがっていたかもしれない。また、共通の基準ができれば、他の教師からの評価や批判はさけられないだろうが、それを怖れて受けいれまいとする姿勢が身につけてしまったかもしれない。教育のあり方を問題にしようとするとき、自己への批判・攻撃と直観して、そこから逃れようとする傾向がなかっただろうか。

生徒の改正の意図を、生徒自身の要求だとは考えず、見解を異にする一部教師の洗脳・扇動だとみてしまえば、生徒の要求を理解しようとする姿勢は鈍ってしまうだろう。そして、その姿勢を失ったときには、すでに指導するものとしての責任を放棄していることになる。

こうした教育放棄の姿勢が付属校一般にないといえるだろうか。

3. 教育放棄

裏口入学事件や文部省のエリート校化反対声明を待つまでもなく、「付属の危機」とか「付属の教育不在」とかいうことは、しばしば聞かされる。それは、おそらく、生徒たちの真剣な要求をそらしてしまう教師のあり方を問題にしているものだろう。

では、なぜそのような教育に非ざるものが大手を振って通ってしまうのか。

まず、教師の生徒観に問題がある。多くの教師は、H. R 活動の停滞とはとらえていない。いいかえれば、生徒の学校生活が生き生きとしていない、いやむしろ無気力にさえなっていることに危機を感じていない。生徒同志の相互不信にも危機を感じていない。したがって、学校生活のなかにある生徒の非人間性を取除くために、取組もうとしないのである。

では、自分たち自身の生活条件の改善にはどう取り組んでいるのか。労働条件のうち、とりわ

け給料の低さは身にこたえる。だが、それと生徒のおかれている状態とを、ともに教育行政のあり方の結果として結びつける発想法はない。かれらは、給料の低さを人事院勧告の完全実施にさえ求めないし、ましてスト権を獲得して賃上げ闘争をすることなど本気で考えはしない。金はいますぐいるのだ。この困難をかれらは、バイトできりぬけることができる。多くの個人に共通する社会的問題を個人的に解決してしまっているのである。

バイトに精だせば、生徒の放置に傾斜していく。このことによって、自己の生活条件へ個人主義的な取組み方が、生徒にたいする自由放任主義的な取組み方へとつながっていることがわかる。

しかし、教育放棄の原因はそれだけではない。いわゆるエリート校の教師にとって、生徒と父兄の要求する一流校へ生徒を送ることは、もっとも大事な仕事になっている。この進学要求への迫従を拒否しない教師たちにとっては、その成否が自分と自分の学校の評価の基準になる。しかも、この価値基準によっかかっていけば、まことにうまいことに、送ってやることに精魂を傾けなくとも成功する構造が付属にはある。なぜなら、もともと進学できる資質をもった生徒を広い範囲から集めた学校だからだ。そして、その彼らに予備校へ行けとすすめれば、一層効果はあがることになる。

さらにまた、競争を勝抜いて来て、敗北の憂目をみることの少ないエリート校の生徒たちにとって、非行へのつっぱしりそれはそれほど激しいものではない。

手のかからぬ生徒たちには、手をかけなくともすむのである。

そして最後に、付属校の利点が奇妙なことに、自由放任主義の温床としても利用されるという点である。付属校は大学の自治の陰にはいって、教育委員会の直接的権力にはさらされていない。勤評の猛威は弱まっている。とばされる怖れも感じない。したがって、生徒の取締りをこととする管理主義を強要されずにすむ。権力に責任を負わなくても、さほど責められはしない。それでは、国民に責任を負うのだろうか。そうではないのだ。自分たちの生活条件を、教育労働者としての自覚もなしに個人主義的にかたづけようとし、また、生徒の生活に危機を感じていなければ国民に責任を負う必要はない。

こうして、教育労働者としての自覚も活動もないという状況が、教育放棄をそして自由放任主義的指導を許す要因となっている。

4. 改正の承認

審議が会則の細目にまでおよぶにつれて、改正運動は難航した。

文化祭を目前にしたその頃、民舞・エレキ事件が起きた。朝鮮高校の民族舞踊を文化祭に招きたいという役員会の要求と文化祭を盛りあげるために自分たちのエレキ・バンドをやらせてほしいという同好会の要求があった。学校は、既にプログラムを組終った時期に、そのような要求を出すことは勝手すぎる。認めがたいという線で指導した。しかし、この反対によって、かえって生徒たちはこれらの要求に唱和した。それは、民族舞踊を介して朝鮮民族の問題を考えようとする生徒たちと、エレキに灰色の日常生活からの一時的脱却する生徒たちと、教師への反抗感をあじわおうとする生徒たちとの奇妙な混交であった。役員会はこの問題をH. R 討論にかけて、全校生徒のものにしようとした。掲示板にはくつか、クラス決議が張出されるまでになった。

しかし、この事件は、別の機会ならば要求の実現を積極的に保障するという教師の側の回答によって一応のケリがついた。生徒たちの要求は、ついに実現することなく終ったが、役員やクラスのリーダーたちは、いわゆる無関心派の多い生徒たちの中での、集約活動のしかたを学びとる結果となった。

教官会議の審議の過程で、改正要求にたいする反対論は多様な角度から出された。その中で、

担任が自分のクラスの討議状況をみて主張した、改正案は役員ら一部の生徒のもので一般生徒は内容をよく知らない、一般生徒から浮いている役員の案は認めがたいという見解はかなり有力であった。役員会は、これにたいして、ビラ・H. R 討論へのオルグの派遣・諸委員会の活用などの工作や、教師との膝を交えての話し合いなどで改正案の精神を伝え、H. R 委員会設置の支持を得ていこうとした。一方、授業時間に、H. R 委員会設置反対論が教師側から出されることもあった。

最後に、生徒の改正案にたいして、教師側の対案を出し、生徒にそのどちらを選択させるという提案が会議を通った。やがて、各H. R から教師案反対、役員会の改正案支持が集約された。教師案が提示されたことが、生徒たちを役員会案に結集させる力となった点は見のがせない。

ついに会議は生徒たちの要求を認めた。生徒会の名称も、生徒自治会に改められた。

H. R 研委は、この一年間の経験から、生徒の学校生活の危機・付属の危機と対決していくためには、指導と分離された生徒指導研究は無力であること、直接指導にあたらなければ生徒たちを变革していくことはむずかしいこと、また自らその分掌を引受けなければ「筋論」の障害が大ききることを結論として持った。

昭和43年度 H. R 指導の記録

1. 指導の準備

昨年のH. R 研究委員会の実践は、多くの失敗と、さらに教師集団作りという意図と全く逆な結果を生んだ。その原因の多くは、やり方のまずきにあったが、そのようなまずさは、例の指導と研究の分離という奇妙な原則から発生した。そこで、われわれはそれぞれの指導を直接できる立場に立って、そこから問題を探りあてる積りで本年度の研究に入った。

3月の下旬に、本年度高一の担任団で年間のH. R 指導の目標・方法、とくに「H. R づくり」という点で、校外指導をどう指導するかということを協議した。ここで、前年度のH. R 研究委員会の構想を継承し発展させる線で研究について他の担任の了承を求めた。

2. 組織づくりの第一歩

入学式について二日間にわたる新入生オリエンテーションが行なわれたが、その中でH. R の時間を約8時間準備した。最初はとに角大変である。

担任としてH. R についての抱負は沢山ある。いきなり、それをしゃべることにした。

— 担任の話 —

人力開発政策という言葉がある。これは諸君を一個の人間としてではなく、労働力としてとらえている。だから、「適性と能力に応じて」ふるいわけようとする。かくて諸君は、受験競争の中にほうり込まれる。誰がそんなひどいことをするのか。それはゆっくり考えてみよう。

所で、諸君の、この学校は諸君と同じように素晴らしい学校である。少なくとも世間も、諸君もそう思っているし、僕もそうありたいと思う。しかし、この学校が選別と選別の間にあって差別の前提としてすぐれているとしたらどうだろう。君達の未来はどうだろうか。面倒な質問はひっこめよう。僕はH. R の担任だから、今H. R について君達に考えてもらおうとしているのだが、それではH. R とは何なのか。恐らく諸君は自分の名前を1年D組の中に見つけたから、僕の点呼に応じ、今は僕の前に坐っている。これもH. R だろう。わかりやすく言えば、H. R とは、生徒管理上の立場から分けけた生徒集団である。ただ、駒場の学校はそれ程管理主義的な学校ではない。むしろ、諸君の半数が良く知っているように、H. R 一つを考えても自由な雰囲気の中で、生徒が自主的に運営す

るという素晴らしい伝統をもっている。だから諸君は、この自由の中で伸び伸びと高校生活を充実させることが出来る。だけど、諸君は受験から解放されているわけではない。これからの三年間、ひょっとすると激しい受験競争に駆り立てられるかも知れない。そこには、孤立した君がいる。友情を渴望する君がいる。無力感にさいなまれた君がいる。適当に馴れ合って、何一つしゃべろうとしない君がいる。青年らしく怒り、喜び、歌うことのない君がいる。相互不信の、仲間でない仲間がいる。君達の半数—いわゆる内組の諸君の名前もくせも知っている教師が前に立って話している。初めて顔を合わせる諸君が半分いて、彼らは、この奇妙な初日に興味を持っている。この二つの集団をうまく混ぜ合わせなければならない。だが、僕は手品師ではないから、自分勝手に君達の自由をとり上げて、H. R活動を強制するかも知れない。君達の自由は、僕の物わかりの良さに由来する。だから、僕の気のふれ方一つで君達は自由を失うにちがいない。これがH. Rなのだ。しかし、僕の今の話はどこがおかしい。では、ほんとうのH. Rとはどのようなものか。

H. Rの主人公は君達だ！ 一人一人が主人公として振舞うためには、一人一人がバラバラの個人であってはならない。みんなで話し合い、個人の要求をみんなの要求に高めること—みんなの力で、H. Rの一人一人を主人公として守っていくことを通して民主的人間をつくるのがH. Rである。

次に、生徒一人一人に自己紹介を兼ねて、高校生活への希望やH. R（学活）についての中学時代の経験、これからのH. Rへの抱負、その実現への方法について話をさせた。

内組生徒は、多分に当り障りのない報告をしながらも、その中で、いわゆる受験勉強を否定し、そういう体制に感わされない高校生活を送りたいという点でほぼ一致していたが、このような雰囲気は外組の生徒を当惑させた。彼らにとって、H. Rはまさに「管理の場」であつたし、「自分達で何かをしよう」と考えるひまに受験にとりくんで来たのだし、それ以外のことを考えていては受験に勝てなかったのだから、やがて彼らは、自分達が大変な学校に入ったことに気づきはじめた。

入学後の感想 — 生徒の作文 —

……、僕がこの学校に入って一番驚いたことは、H. Rである。朝から晩までH. Rであるし、僅かな休けい時間や楽しかるべき昼食時間も、H. R総会か班会議で、全く息つく暇もない。駒場は有名な進学校だと思ったが、日本一のH. R校であつた。

しかし、大部分の彼らは、内組の生徒に迎合して何かH. Rというものについて、気の利いた発言をしようと努めたが、それは例えば、「みんなと一緒に一生懸命努力をしたい」というような実態のない言葉に終った。内組の受験勉強否定も、大部分は、受験勉強で鍛えられて来た新しい仲間（外組）を迎えるのにふさわしいインギンな自己主張であつた。だから、外組の一人が、「受験が何故わるいか、受験勉強を否定して立派な理想を並べ立てていても何にもならないではないか、制度としての受験が悪いのなら、それを改めるべく力のある人間になることが必要で、その為には受験に正面から立ち向かう人間で悪い筈がない……」と主張した時、内組の生徒は、明確な論拠を持って反ばくしえなかった。

したがって、内組の生徒でさえH. Rについての教師の話を聞いても、自分達がどのようにし

て活動して行けば良いのか、彼らなりの理想、あるいは個々の抱負を実現する方法については黙りこんでしまった。

ここで、担任から「ほんとうのH. R」を実現するために「班活」を行なうべきことが要求された。外組の大部分は、「班」とは掃除の班のことと思うような状態であり、内組の一部は「班活」を付属駒場中学校で経験して来たが、それも必ずしも十分な段階に達していたわけではない。為、「班活」を束縛の状態ととらえて、そこから意図的に逃避しようとする姿勢もあった。だから、ここは有無を言わず、班づくりが「強要」された。

班活を押しつけられた生徒達は、自分達の班を、自分達でどう作るか議論した。機械的につくる案とか、趣味でつくる案とか、アミダとかである。こうした雑多な提案で混乱した中で、教師から内組・外組別の討議班、半数ずつの生活班の班編成方法が提示された。

—— 討議班と生活班 —— 担任の話 ——

これは、担任が一年間もの永い間考えて来た構想である。

駒場は変な学校で、新入生の半分はお互いのことは勿論、新しい担任や教科担当教官のアダ名からクセ、家庭の事情まで熟知しているのに、残りの半分は何もわからないので、同じ学年でも何か後輩のような気分させられてしまう。何もかもわかっている奴と、わからん奴がいるという事実から出発して、わからん奴に対するわかっている奴の「親切的援助」を「当り前の組織活動（の援助）」におきかえることが必要ではないか。生活面では、半数ずつの生活班の班内で「援助」されるが、その相互の状態を討議班の中で検討してみてもどうだろう。

生徒はこの面倒臭い提案を承認した。恐らく議論が面倒なことで、担任が一年間もの永い間考えて来たというくだりに参ったのだらう。かくて、班が作られ、立候補や押しつけで、混乱しながらも班長が選出された。ついで、立候補制で各種のH. R役・委員を選出した。討議班が推せんの母体としての役割を果たした。

3. 自主性と指導性と

各班の班長が決まると、その日の放課後、最初の班長会議が開かれた。班長会議が民主的に運営されるようにするにはどうすれば良いかということが話題の中心であったが、H. Rの役・委員に立候補が少ないことに関連して、教師のH. R役・委員についての考え方が問題となった。ある生徒は中学時代の経験からだと言って、教師に「委員を雑役係にしないよう」に要求した。担任は、この要求をアッサリ容れることにした。班長会議の運営については定例化すること、議題は事前に各班で検討し、決定事項は各班で討議・承認することを決めた。

次の日、前日の班長会議とこの朝の班長会議をへて、H. R総会が開かれた。議題はH. R運営方法で、1. 議題の扱い方 2. 議長・書記 3. 班長会議の役割 4. 日直制 5. 班ノート 6. S. H. R を定例でもつこと などである。

これらの討議の中で班会議の結果を無視して、班長会議で個人的な見解を班の意見のように発表していることが分った。これは、H. Rの民主的運営にとっても危険であり、班長会議の浮き上りの原因となると考えた担任は、その事実を暴露し、重ねて委員・班長が出来るだけ代表する集団の意見を正確にそれぞれの会議に反映させるよう要求した。

その直後、一人の生徒から担任について検討するよう緊急動議が提出された。議題としては、正式な手続きを経ていないということで、多数の生徒はこの問題をとり上げることに反対を示し

たが、担任は、重要な議題だからゆっくり話し合うようにと反対を押えた。生徒達の討論にあらわれた主な見解は、「担任の発言権は認められるが議決権は認めない」というような形式的なもの、「担任の介入は、自分達の自主性を脅かす」「自主的に運営しろと言われているのだから、担任は直接発言出来ないようにしよう」という意見である。これらの意見に対し、担任は次のような内容の発言で指導を加えた。

— 担 任 の 話 —

君達が、君達の中で僕がどう振舞うべきかを検討したことは、君達がH. Rを自分達のものだと自覚しつつある証拠だと思う。しかし、自主性の大切さを、若しかしたら僕からもらった君達が、教師を当面の敵だと考えることはわかり易い図式だけど、僕が君達の誰かの言うことを聞いて後の方へ引込んでしまったとき、君達の自主性がどうなるか。僕は今、そんなことまで考えている。教師の勝手な老婆心だけど、僕の判断では、まだ結論を出す段階ではないということだ。教師の指導性と生徒の自主性が相容れることの出来ないものかどうか、これから一つ一つの事柄に取り組むことではっきりさせようではないか。

生徒達のノートによれば、「担任の地位、権限従前通り！」という結論になった。

この議論の後で、校外指導について話した。それは、5月末の妙高高原H. R合宿のことで、高一の校外指導が「旅行」から「H. Rづくり」にかわったいきさつや、「H. Rづくり」の意義が説明された。長い説明の中で、生徒達の肩に重く負わされたのは、この行事を「みんなで、自主的に、運営してみろ」という教師の要求だった。

4. 無関心分子との斗争

二、三日して昼休みに班長会議が開かれた。校外生活のプランは、個人個人のプランを班でまとめ、班のプランをH. Rでまとめるという方法で作ることが約束された。また、個人のプランを作る上で現地の様子が分からないことが問題になり、現地調査に当たった担任から、その都度、話を聞くことで解決できるかどうか、余り実りのない議論がなされた。現地の事情は教師の話だけでは決して充分には分らないし、何かを計画しようと考えれば、それがひっかって仕事が前進しない。このことは確かなのだが、具体的な計画ということは重視するような顔つきで面倒な仕事から逃がれようとする者が多いのではないか、という意見が出た。

この日の放課後、各班の話し合いが行なわれた。班としての校外生活の取り組みは、とくに外組班が遅れているということで、担任も外組の三つの班をまわって話し合いに参加した。外組の生徒達には校外生活プランを全然考えていない者が多く、また、細かな時間の区切りの中に、いろんな行事を押しこんだだけのものもあって、行事を自分のものとして受けとめる目的意識など殆んどみられない状態であった。

そこで、ひとまず、自分のプランを持っていない者に対してはすぐプランを作るように命じ、また、全体には、一人一人の意見を尊重しながら班のプランにまとめるよう要求した。共通の目標を欠いたままで、そのような作業が進められないことに早く気づくよう期待しながら。

次の日のS. H. Rで、班の話し合いについて担任から次のような呼びかけが行なわれた。

— 担 任 の 話 —

- 校外生活の準備を、自主的に、誰かがやってくれるなんて考えるのは、甘すぎないか？ 誰かとはいつも君自身のことなんだ。

- 校外生活のプランを作る上で、自分達の目標を作ることがどういう意味をもつか。共通の目的意識を欠いた集団が、一つの集団としてのまとまった力を発揮することは出来ない！
- 「H. Rづくり」なんて言葉はどうにでもとることが出来る。だから、みんなすぐ賛成しても、実は何一つ決めたことにはならない！

次の日の放課後、班長会議が開かれた。そこで昨日の担任の話に関連して「H. Rづくりとは何か」また「班活の強化とは」ということが問題になった。

内組の班長から「H. Rづくりとは班にこだわらず、班をこえたものを作ることである」「班は旅行前の準備に必要であるが、旅行に出掛けたら班段階をこえて楽しくやろう。これは中3の時の経験で班にそくばくされた旅行は味けなくつまらないものだった」というような意見が強く出された。これらの意見は、この一週間、担任から班活動を強く要求されつづけた生徒達の反発でもあった。また、外側から要求され、自分達の中に班活の必要性を具体的に把握していない生徒にとってみれば無理のないことであるが、バラバラで集団として何一つ出来ないことに何の不自然さも感じていないから、班活を肯定的にとらえている班長でも「H. Rづくりとは班体制の確立したH. Rをつくることで、その場合、注意したいことは、その中で互に尊重して……」と注意したい条件をあげている。一週間、班活を強く要求してきたといっても、生徒の内側に変革を要求するような力とはなりえていかないわけだから、入学してH. R、H. Rと騒がれて驚いている外組の生徒は、「H. Rづくりとは要するに互の親睦を深めることだ」というようなありさまであった。そんな討論から、次のようなことが決まった。

- どんなことでも言えるようなH. Rにしよう。
- スポーツの親近感はあるが表面的、話し合いでお互いをよく知ろう。
- 班は少人数で気楽だが、馴れ合いが出来やすい。それを防ぐ為には「個人の確立」が必要である。

これらの内容は、決して満足すべきものではない。特に班の馴れ合いを「個人の確立」で防ごうという点など、班の意義を全く不十分にしかとらえていない結果といえる。

この話し合いに続いて、H. R委員から班長に、「無関心派をなくそう！ 積極的に討議にまきこもう！」という呼びかけが行なわれた。

—— 班長会議の討論 ——

- 無関心派とは何か。自分にも逃避したい気持はある！
- だから積極的に討論の場をつくって、そこへ引きこもう。
- 無意識の無関心派は？
- もうごめんだ！ 理屈ばかり言っても何も出来ないではないか。雰囲気大切だ！

この話し合いは、次の日のH. R総会に続いた。H. R委員を先頭に積極派が呼びかけた。

「無関心な諸君、話し合いに入りたまえ！」反論がすぐに返って来た。「黙っていることは無関心ではない！」H. R全体がしらけた空気になって、積極派はむしろ宙に浮いた感じだった。H. R総会が終わってから担任はH. R委員と話し合った。指導というより、このしらけた空気をどう收拾するかの手がかりをつかむ努力だった。言葉のやりとりで終らないような、具体的事実について討論することが必要であることを指摘した。

4月19日は定時のH. R総会である。前日の「無関心派」問題は、一応棚上げにして、合同班長会議も迫っているので、すぐに校外生活のプランの討議に入った。所が内組のA・C二つの班が班のプランを提出できなかったことから、A・C班に対し非難が集中した。

これに対し、A班の班長は「完全なものがいつ出来るか分らない。いそげば急げるが、馴れ合いでも良いのか?!」と奇妙な論法で反論したが、「それでは、いつできるのか、せめて見通しだけでも聞かせて欲しい」と言われて、返す言葉に窮した。無論「完全なもの」「馴れ合い」も馴れ合い論法だったから、見通しなどあろう筈はなかった。そこでH. R委員が「A班の問題はほんとうに馴れ合いそのものではないか。この問題をみんなで考えよう」と提案した。「無関心派」問題の煮し返しである。この提案が支持され、「無関心派問題」は思いもかけぬ程早く再びとり上げられることになったが、それに続く話し合いで、ひどい相互不信が露呈した。

生徒の討議

- 試験とH. Rを天秤にかけている連中に話をしても無駄だ。
- 高3になって班活でもあるまい。H. Rより受験をなんて考えている奴がいる。この話し合いの最中も辞書を暗記している奴がいるんだ!
- 今はそういう状態があるとしても、そういうものを克服するために妙高に出掛けるのではないのか!
- この状態が改善できるなんていうことはありえない!

H. Rの話し合いは、長々と続き、次第に「相互不信」が露呈していった。

次の日、担任は授業の合間にH. R委員を呼んで、「相互不信」問題について話し合った。担任は、「相互不信」を話し合いだけで克服することは出来ないから、話し合いを適当な所で区切って、来週に迫った合同班長会議に間に合うよう、目標や計画など具体的な問題の話し合いを進めること、「相互不信」は、H. Rの課題として機会をみて取り上げることの必要を説明した。これに対し、H. R委員はこの問題が一番重要だから、自分達の考え通りに進めたいと主張したため、一応担任も了解した形で、放課後のL. H. Rが持たれることになった。

この日のL. H. Rは文字通り超L. H. Rになった。土曜日だったので午後1時半からH. Rが始まり、8時少しすぎるまで「相互不信」をめぐる果てしない議論が続いた。しかし、話し合いの内容は「泥を吐かせる」どころか自分の殻に閉じこもる「無関心分子」はますます口を固く閉ざす結果になった。その原因の一つは、この夜遅くまでのL. H. Rが肉体的に苦痛であったし、意識的でない無関心分子には、明らかに集団の強制と感じられたようである。また、「積極派」が、それこそ積極的にここまで押して来た背景には、自分の中にも「無関心」の方向へ逃げ出したい気持ちが強かったから、この斗争で自分自身を逃げられない場へ追いこもうという意図があったようである。この「事件」とも言えるような超L. H. Rは、他の教師・生徒の母親にも強い関心を持たれたが、その方向はH. R活動の行き過ぎとして受けとめる方向であった。

5. 合班——C組によるA組の追求

4月22日、第3週の月曜日、最初の合同班長会議（合班）が開かれた。合班の性格・運営方法が検討された後、すぐに各H. Rの校外生活（H. R合宿）の目的が提案された。

—— 各H. Rの提案 —— H. R合宿の目的 ——

A組：相互理解，団体生活

B組：高水準の集団生活を通じ，相互理解を深める。自然に親しむ。

C組：自然に親しむ。友好関係を深める。

D組：相互理解，視野を拡張，班員が互いに協力。

提案が説明されるとA・D組の遅れが目立った。特にA組は，行事そのものを旅行としてとらえ，班も旅行の便宜と考えていたため，C組の班長達から追求された。H. R活動一般を班活を基盤としていく方がすぐれているというC組に対し，「真の相互理解」などという重要なことを少数の班の中に限ることは危険ではないか，とA組側が反論したが，C組の班長から「われわれの間にある問題は現状認識の差である。受験競争の中で友好的な人間関係を自然発生的に求めることは出来ない。班活以外にどんな方法があるのか」とせまられてA組の班長達は充分論理的に応えることが出来なかった。

この追求は「遅れたH. R」に対する「進んだH. R」の一方的批判であった外に，更に重要な問題を含んでいた。この指導に当たっていた合班顧問も，その重要な問題，後に分ったことであるが，C組班長の浮き上り一には気づいていなかった。従って，一般的な意味で，合班が，「H. R中心主義——部落意識」の場にならないように，また，「批判・追求」が遅れたH. R・班に対する「援助」であるべきことなどを指導した。生徒達は，集団の連帯の強いきずなどとして「批判・追求」を行い得る段階に達していないことは勿論である。

6. D組の立て直し

合班が開かれるようになって，D組の「取り組み」の立ち遅れが，かなりはっきりしてきた。すでにプランの具体的な検討を進めているH. Rがあるというのに，D組は目標の討論さえまだ十分に深まっていないのが実状だった。それをもっとも痛感していたのは，合班のメンバーとして出席していたH. R委員，班長だった。したがって合班後の班長会議は，真剣そのものであった。彼らは，自分達のH. Rの「目標づくり」が具体性をもてないのは，「現状認識」がしっかり出来ていないか，「現状認識」と「目標づくり」が別個のものになっているのではないかということの問題にしまじめた。この二つを結びつける考え方は，合班でC組の代表から耳の中にたたきこまれたことである。班長たちが見つめはじめた現状は，内組と外組の問題，相互不信（連帯性の弱さ），無関心，馴れ合い，集団としてのまずさであり，それらの原因のかなりの部分は受験や社会体制など彼らの手の届かないところにあると考えた。だから，いろいろな問題を一挙に自分たちだけで解決してしまうことは出来ない。しかし，自分達で出来ることをみつけ出したそこから解決してゆこう。そのためにバラバラの個人を組織すること，話し合いはお互いの意見をよく聞き，徹底的にする——組織の中で何でも話し合うこと，馴れ合いをなくすことから始めよう。「班体制を中心に組織活動を強化する」ことを，「目標」の班長会議案として決めた。

次の日から班会議，H. R総会をひまをみては開き，班長，H. R委員による説得・工作が行なわれた。合班に出席していないH. Rの大部分の生徒が，この班長会議の論法に素直について行けなかったのは当然である。H. R委員と班長は口をそろえて「合班を傍聴してくれ，俺たちのH. Rはすごく遅れているんだ」と叫んだ。その日の合班にはB組のH. Rの大勢がなだれこんだことはいうまでもない。二日間の討議で「目標」はH. Rの全員の賛成を得て決まった。合班の少し熱ばい雰囲気は彼らに影響を与えたことも大きい，素朴な競争意識もH. Rのエネルギーになっていた。

7. 合班——目標の決定

合班は放課後、殆ど連日のように開かれた。そこでは各H. Rの目標討議が報告され、検討された。内容が次第に高くなっただけでなく、各H. Rの討論も活発になっていた。だが、まだ一部には、「自主性とか何とか言っても、結局は教師からおしつけられるのだから、何が自主性か」という声もあった。しかし、その声をはねかえすように「旅行は自分達がくのだ」「正しいこと、意義のあることは自分たちのものにしよう」という声が大勢を占めた。教師からは、「H. Rの主人公は君たちだ。君たちを主人公らしく振舞えるように支援するのが教師の役割だ」という説明が追加された。

合班は次第に共通な言葉を持ちはじめたが、尚こまかな表現やニュアンス、あるいは同じことばでも、その意味がちがうなどの議論が出て、4つのH. R共通の「目標」には遠かった。この事態を救ったのはD組の代表たちである。彼らは自分たちのH. Rの立ち遅れを解消させた「合班方式——現状認識」から議論をやり直す方法を、合班に思い出させる役目をした。各H. Rは自分たちの現状を分析した。発足間もない各H. Rの現状に、かけ離れた特異性はない。「無関心」「非協力」「言いたいことが言えない雰囲気」「内と外」などの現状に変わりはない。だから「心を割って話し合えるように」「H. Rに積極的に参加」「班を大切に、班は行動を」などのスローガンも異口同音であった。こうした討議のフィードバックで、4つのH. R、169名の共通の目標は次のように決まった。翌日、C組を除いて、各H. Rはこれを承認した。

「班体制を中心とした組織活動の強化」

干からびた文字の中におびただしい議論があったのである。

8. 外組は要求する！

合班が目標を決めた日、D組のH. R総会では班の改造が問題になっていた。新しいH. Rが発足してからすでに半月を経過していたから、「内・外と別れて討論することは、むしろ内・外の壁を作ることだ！」という内組の生徒の意見には一理あった。これに対し担任は、次のようなアドバイスをした。「壁を作る意図はないが、壁は入学式の日からあった。例えば、入学式を終えた日に内組の何人かは上級生とクラブ活動にハッスルしていたが、外組の者がその打ち解けた雰囲気を壁と考えれば、これはずい分高い壁ではなかったか。半月たった今、お互にこんな壁を容易にとびこえることが出来るほど成長したといえるかどうか。お互に相手への要求を出しあった上で考えようではないか」

—— 内組は要求する —— 各班の報告 ——

- 積極的に考えを言え！
- 良い点は見習え！ 悪い点は遠慮なく言って欲しい！
- クラブに入れ！ 知らないこと（学校の）は聞け！
- 内・外の差はない！ 気にするな！
- 女の子のことについて教える！

—— 外組は要求する —— 各班の報告 ——

- 身勝手な言動が多い。理屈っぽい。
- エリート意識が鼻につく。
- 馴れ合いもいいが節度を保て！
- 団結が固くて入れない。
- 「駒場語」が分らない。

内組の人を喰った要求は「内・外の差はすでに解消した。現状で良いではないか」という身勝手な現状認識から出ている。彼等に対する外組の要求は、予想以上に厳しかった。特に、内組の生徒達が、三年間の学校生活の中で作って来たお互いの関係——「友情」はそれぞれがどんなに薄く崩れ易い壁であっても、「駒場語」を頻繁に駆使して外組を寄せつけなかった。得意になって中学時代の経験をH. Rに持ちこんで、勝手に自分達だけで分り合う「馴れ合い」も、外組から指摘されれば顔を赤らめる材料でもあった。「良い点を見習え！」胸を張っていた生徒は、反論しようとしたが、担任はそれを押えた。「ていねいに分り合うためには、ただ『エリート意識が鼻につく』といわれても何のことがわからないから、少し討論が必要だと思う。しかし、個人的な癖に属するようなこともあるだろうし、話し合いで一ぺんに解決するわけではないから、今日はお互いの要求を確認するだけにしよう。これからの生活の中での課題としていくことが出来れば、「壁」を超えるのは時間の問題だから、班の改造にとりかかっても良いだろう」

生徒達は、班の改造について話し合った。新しい班は生活班を基礎として考えるということので一致したが、改造は時期を考えてということに落ち着いた。

それぞれの要求は、言いあっただけで終わった形になった。非常に中途半端な印象は避けえないが、担任は現在の段階での要求の深まりが、内組を依怙地に団結させる可能性もあるし、それに耐える力が外組にはないと考えていた。

9. 合班——組織づくり

校外生活の「H. Rづくり」の目標が、「班体制を中心とした組織活動の強化」という形で決まると、すぐに活動内容が合班で検討された。活動内容の輪かくが描かれるとその細部を検討し、運営に当る組織として実行委員会がつくられた。特に実行委員会と合班、各H. Rの関係を強化するという意味で、実行委員会には、合班から2名の代表が参加し、H. R選出の委員リーダーをつとめることになった。

—— 諸 組 織 ——

班 H. R活動の基盤

- 批判と援助で互いに向上しよう。
- 個々の意見を尊重し、共通点を見つけ出そう。
- 班活に積極的に参加し行動しよう。
- 班長は班員の意見を班長会議で代表し、班長会議の決定を班員に伝える。

班長会議

- 各班の活動の調整・意見の集約に努める。
- H. R総会に代行して問題を処理することもある。

合同班長会議（合班）——生徒集団の自主的運営の中核

- 各班・H. Rの活動の調整・意見の集約
- 合同H. R総会に代行して問題を処理できる。

H. R委員会

- 必要に応じて合班に代行し、緊急の場合問題を処理する。

実行委員会——交通（バスの時間を充実させる）・ハイキング・レクリエーション

- 合班から委任された仕事について立案し、合班の承認を得て実行する。

10. 自主規律への布石

4月も末近くなるとH. R総会は、また一段と忙しくなった。合班で「目標」が決定され、活動内容が検討されるにつれ、それらの審議と各実行委員会の報告、音楽祭実行委員会、生徒会の代議員会報告などが相ついでH. Rに持ちこまれるようになった。

D組のH. R独自の問題としては、「班改造」が懸案だったし、合班より少し前に「自主規律」問題に各班が取り組みはじめていた。

「自主規律」について最初に各班の報告がされた段階では、「規律を自主的につくっても守れないから無駄だ」「常識的なものをつくれば良い」といった意見が多く、「自主規律」への関心は著しく低かった。この状態に対し担任は、『自主規律』は、教師の管理的な要求を生徒が請け負って、自主的に規制することではなく、生徒集団が、その集団の目的を達成するために、個々の人間、班、場合によってはH. Rを「自主的に規制する」ことが必要であり、集団として何かをしようとすれば、その為に絶対に約束しなければならないことであるという点を強調し、それを自分たちのH. R、班の活動に照らし合わせて検討するように要求した。この後の班長会議で、「自主規律」をつくることが決まった。一方で、民主的な集団の代表者を要求されながら班会議を招集するにも一人一人に頭を下げて人集めに努力している班長達には、規律の実践的な意義が良く理解出来たからであろう。

班会議とH. R総会は「規律」の内容の議論に追われた。

「規律」は、この行事の指導目標の成否にかかわる問題である。合班での討議の見通しも、これまで決して明るいものではなかったが、まずD組が「自主規律」を決定したことは、合班への布石となる。D組が合班をリードするであろうという見通しを持った。この日、討議班を解散して生活班にまとめた。

11. 合班——自主規律をつくろう

4月27日の合班で「自主規律」についての各H. Rの動きが報告された。そこでは、「自主規律」をつくるというD組と、特にそのようなものをつくらなくても目標に沿って行動すればよい、規律をつくって批判すれば吊し上げになるというA組の意見が対立していたので、さらにH. Rごとの討論が続けられた。5月1日の合班では規律についての論点はいっそうはっきりして来た。それは、集団に「自主規律」は不要であり、各人の常識で行動すれば良いという考え方で、中学時代に規律をつくって結果的には失敗した経験や、規律は根元的には教師のものであるという考えが、表面的には、個人の責任と相互の信頼という美しい言葉で飾られていた。さらに、彼らの考えの根底には、「自主規律」が要求するであろう厳しさから逃れたい気持ちが強かった。「規律をつくらなくてもうまくやっていく集団をつくろう！ 個人の責任感に訴えよう！ その危険を恐れるな！」

これに対し「自主規律」をつくろうとする考えの中にも、微妙なちがいがあった。班で規律をつくる。しかし、H. Rや学年全体で決める必要はないと言う意見と、学年段階の規律まで考える意見とであった。ところが、規律反対派の奇妙な理屈を一つづつはいて行くことによって「自主規律」を積極的に考える生徒達の意見の微妙なちがいが克服されていった。「自主規律」を否定する考え方には、「現状認識」の議論の際に確認された筈の「馴れ合い」に抜け道を開いていること、個人の常識の差をどう埋めるか、その手だてがはっきりしていないこと、目標が組織活動の強化であるのに、「個人の…」では矛盾しないかななどの弱点があって、次第にそれらが暴露されていった。とりわけ、合班の集合時間が守られずに困っていた事実が検討され、「規律」を自分達のものとして把握する理解に役立った。

この討論を通じて、C組の代表たちは、終始「班段階の自主規律」という主張をかかえなかったが、これに対しD組のH. R委員から、「それは個人のだらしなさを班に拡大しただけではな

いか」と追求された。結局組B、D組中心とした学年全体の「自主規律」を作るという主張が反対派を説得して決定された。

その直後、A組の班長の一人から、合同H. Rを開く要求が出された。「自主規律」の内容を決める前に、各H. Rの総会だけでなく、全生徒との話し合いをしよう。自主規律が全体の支持をえていることを確認するために、合同H. Rを開こうという提案であった。「自主規律」を積極的に支持して来た生徒たちは、「規律」を自分たちと対立的にとらえる仲間を根気よく説得しつつあっただけに、この時点で合同H. Rを開くことの危険に気づいて、反対した。さらに、H. R委員、班長の点検を合同H. Rでしようという意図が、この提案の中にあった。それは、C組の一部の生徒が、A組の班長と結んで合班の決定をくつがえそうというたくらみでもあった。話し合いが進む中でそのからくりが露呈し、合同H. R案は提案者自ら撤回した。この間、指導に当たった教師は、A組の班長の提案の中に、C組の班長に対する「報復」的な感情があることに気づいていた。一応、結着がついた段階で、各組織の点検は「援助」のためであり、その組織や組織の代表に対する攻撃にならないように要求した。「規律」とこの問題をこういう形で処理したことで、合班は組織として少し前進したような雰囲気の中で、C組のH. R委員から緊急提案が出された。

12. 合班——C組との話し合い

合班がA組の合同H. R提案を克服したとき、C組のH. R委員から、C組の班長と班員の間にあるギャップを埋める為に合班に協力を求める提案が出された。

C組のH. R委員、班長は、合班の初期に、特に指導的役割を果たして来た。「現状認識」「批判」「点検」など、すで合班に定着してしまった「合班用語」、討議形式などを合班に持ちこんだのは、彼らであった。それが目標の討議が進むうちに、次第に沈黙が多くなったばかりか、討議が熱して、各H. Rの提案が接近すればするほど、「俺たちののは、お前たちの提案とよく似ているが、本質がちがうんだ!」と、話し合いの進むのを拒否することが多くなった。そして、たった今わかったことは、H. Rの中の一部のものが、内部で話し合い解決しなければならない不満を、他のH. Rの代表を通じて合班に暴露し、さらに合同H. Rで自分達の班長、H. R委員を吊しあげようとしていたのだった。

次の日、合班とC組の話し合いが行なわれた。

— C 組 の 主 張 —

C組が考えた目標は、「真に自然に親しむ」ということで、これでH. Rの目的である班体制づくりが自然に出来る。「真に自然に親しむことは、仲間と自然の遊びを分かち合うことであり、それが校外生活でのH. Rづくりである。だから、当然結果として出来る班体制づくりを目標にするのはナンセンスである。

— 合 班 の 主 張 —

素晴らしいH. Rをつくろうとする共通の目的がある組織された集団(班)だから、自然の遊びを分かち合うことができるのではないか。その組織づくりがH. Rづくりの第一歩である。

お互いの主張が出尽して、議論が平行しはじめた所で、この話し合いは打ち切られた。C組

は、この日夜8時ごろまで、H. R総会が続き、担任、班長の説得で合班の決定をほぼ全面的に承認した。しかし、彼らは、説得されて、納得したわけではなかった。むしろ、論理的に矛盾が追求されなければされるほど、感情的には反発したが、話し合いが長びくのに耐えかねて合班の提案に妥協したというのが実情であった。また、この合班、C組の話し合いではっきりしたことは、このH. Rの中で班長が浮き上った存在になっていたことであった。

合班の進み方に対するもう一つの抵抗勢力、A組の中にある個人主義的傾向も見逃せなかった。しかもこのH. Rの場合は、班長の力は弱く、合班、H. Rそれぞれの空気は充分に交流していなかった。その上、合班はC組の問題に忙殺されていたので、このH. Rに対する働きかけは出来なかった。そこで、合班指導の教師は、C組、合班の話し合いの行われた日に、A組の有志生徒達との話し合いを行った。生徒達は、「集団は本質的に個人、その個性に対立する」と主張したが、現実には、個人やその個性を守るために、集団が必要であるという点では納得せざるを得なかった。

13. 合班——準備完了

C組に根強かった反合班の空気が治まると、合班の仕事は急速に進んだ。それまでに合班として懸案になっていたことは、H. R統一テーマで討論会を開くかどうか。「自主規律」の内容と「相互批判」をどうするかということであった。これらの討議の過程で、常に執拗に繰り返し登場してくる個人主義的な見解は、その都度克服されて行った。「妙高原生活」(ホーム・ルームづくりのしおり)の原稿が出来つつあったことも、合班の一人一人に具体的な見通しを持たせ、自信をもたせる働きをしていたからにちがいない。

—— 学年による自主規律 —— しおりから ——

このように班による自主規律が決定していくとともに、5月に入ると今度は学年による自主規律の案が出されてきた。この案は、各班による自主規律を尊重しながらも、学年で整理しておくべき基本的事柄について学年で統一し、それを明文化しておくことによって、集団として実際に我々で規律を守っていこうとする案である。この案が承認されるとともに、各クラスで具体的討議が行なわれ、次の7項目が決定した。

1. 時間厳守
2. 自分勝手な行動をやめる。
3. 責任をもった行動をとる。
4. 他人に迷惑をかけない。
5. 自然を守る。
6. 行動を迅速にする。
7. 集団行動に積極的に参加する。

今度の規律は、上の7項目をもとにつくられる。われわれがつくるのだ。規律はそれを守ってはじめて意味がある。われわれは時として規律を軽視することがあるし、それを側で見てもみてみぬふりをしがちである。それをのりこえてこそ始めて真の集団への道が開けてくるだろう。

それをやるのは僕達169人なのだ。各人がこのことを心に記録して、努力することを期待してやまない。

なお、規律を守るためのミーティング——相互批判は、班→H. R班長会議→合班という形で

積み上げてまとめ、それを各班におろすという形をとることにした。

合班の準備活動は、5月9日にほぼ終わった。各実行委員会の仕事もほぼ完成に近かった。中間試験まで一週間、行事まで11日間を余していた。途中、集まりが悪くて合班が流会したのは最後の頃の一回だけであった。

14. 現地での記録

長時間のバスから降りると、生徒達はみな荷物を手にしたまま所在なく立っていた。教師は何一手出しをしなかったのだが、生徒がその意味に気づくのに少し時間がかかった。「自分達で運営する！」我にかえたように生徒達が動き出した。班長やH. R委員がそれぞれの仕事を始めた。部屋割り、荷物整理等が終ると全員が広間に集められ、オリエンテーションが始まった。学年主任教官の挨拶の後、「目標」「規律」などが、合班の代表者達の分担で説明され、全員でこの行事を成功させるように再確認がなされた。

個々の行事は、天候にたたられてハイキングの規模を縮小したことで、三日目の班別自由活動の一部が、予定地付近の積雪が多いために変更になったことを除けば、大体計画通りに進められた。しかし、すべてが計画通り目標達成に向ってうまく運営されたわけではない。特に班で活動する時は、個人主義的な傾向が特に顕著になった。討論に背を向ける者も少数ではなかったし、ハイキングで山から降りるときなど、バラバラに三々五々群れて帰って来るという光景が見られた。しかし、生活上の諸問題、例えば入浴順・起床後の運動などの各班の利益に関する問題は、合班で処理され、日々改善されていった。

行事の中心は、討論である。まず、各班で「クラブとH. R」という統一テーマについて話し合いが行なわれ、そこで話し合われたことが、H. R総会に報告された。H. R総会はテーマについて各班の報告をもとに、H. Rとして意見を集約し、それを合同H. Rへ報告しなければならない。

D組のH. R総会へ報告された各班の意見は、H. Rもクラブも大切である。従って両立させることが必要であるという点では、共通していた。しかし、現状では、時間的に競合していたり、H. Rにはヤル気のない者が多いとかの理由で、両立はしがたいとする班と時間面の競合は別として、H. Rの運営のしかた如何で方法はある。むしろ両立しないのは、H. Rの目的を理屈でわかっている積りでも、それを主体的に受けとめる姿勢がないからだとする意見が対立した。H. R討論は、予想以上に時間がかかった。しかし、H. R討論の結果は、最夜の夜の合同H. Rへ報告されなければならない。計画の中に予定された時間以外に、牧場へスポーツ大会に出掛けた往復バスの時間も、討論に使った。

H. Rとクラブ —— 各H. Rの報告 —— 合同H. R

A組：時間的に競合する。班を活用することが必要である。

B組：クラブへ積極的に参加しよう！ 参加できない理由をのべあった。

C組：目的は同じだが、時間的に競合。班を重視し、時間を積極的に利用しよう。

D組：H. R、クラブの意義を確認した。クラブに関心は強いが、勉強、H. R・クラブが両立しないというのは、H. Rの意義の掘り下げ不足である。

これらの報告を中心に討論が行われたが、O君（H. R委員）の意見は総括にふさわしい。

— O君の意見 — 合同H. R —

H. Rとクラブが、時間的に競合しているだけではない。時間を短かくしたらH. Rやクラブがさかんになるだろうか！

討論の後半は、高原生活の反省会になった。各H. Rの反省のまとめが報告された。

— 各H. Rの反省のまとめ — 合同H. R —

- A組：全体に成功させようという意欲があり、班活や自主規律はうまくいった。合班の計画は忙しく、合班は先走りした。
- B組：目標の認識を深める努力が不足していた。その為、自主規律・相互批判・組織活動がうまく行かなかった。合班は理想主義で、現実の動きを無視していた。
- C組：自主規律・相互批判はうまく行なわれた。組織活動は不徹底であり改善の必要がある。
- D組：目標が抽象的にすぎ、合班の考えは浸透しなかった。組織は実際場面で役立たずH. Rのまとめが弱かった。規律では合班が駄目であり、相互批判はなかった。どういうわけか楽しかった。

これらの報告の後、討議が続いたが、班会議・班討論の不充分なことがらにつけ加えられ、H. Rの目的を自分自身でしっかりつかもうということで反省をまとめた。

15. C組——車中のクーデター

合班との話し合い以来、C組の一部には、班長——合班——担任に対する反抗が底流していた。帰りのバスの中のH. R討論で、この反抗が爆発した。その契機になったのは、合班でもリーダー格のある班長が、現地で自分達の班が犯した過失の自己批判をして、みんなの本心を吐き出させようとしたことであった。大部分の生徒は、これには何の関心も示さず、型通りの各班の自己批判的な総括が報告されたまま暫らく沈黙が続いた。そんなとき一人の生徒が発言を求めた。

— M君の発言 —

H. Rの討論につぐ討論、あれは理想の世界の出来事で、現実には灰色の受験勉強だけだ。僕はこんな学校で、仲間づくりとか、親友とか、そんなことは不毛だ！ 絶望だ！ 型にはまった討議、形式論理、青臭い理想が一体何になるのだ！ こんなつまらないH. Rなんかやめちまえ！

異様な反応がバスの全員を揺振った。担任は「Mのような不満・要求を何故今まで出さなかったか。それをまとめて実現するのがH. Rではないか」と指摘した。班長が反論した。「準備と妙高の宿舎で、班活を通して心の触れ合う討論ができた。この成果をどう評価するのか」この発言は、反抗をあおり立てる役を果してしまった。堰を切ったように、班長——合班——担任に対する非難の声が上がった。彼らは、この時はじめてH. Rを自分達のものとしてとらえた。自分達のものとしたとき、その利益を問題にした。興奮した議論が続く。

— 討 論 —

「誰が利益を保証するのか」

「仲間だ」

「今までのH. Rは偽善だ！ みんなヤル気があるか！」

「態度で示そう！」

コーラスが始まった。暫らく声も出せなかった班長たちもコーラスには参加した。しかし、さまざまな駄じゃれに混って、「担任は張り子の虎」という声が飛び出すほどの雰囲気だった。

担任は、この反発するエネルギーをH. Rづくりに役立て得ると考えた。担任は時期をみて生徒達に話しかけた。

— 担 任 の 話 —

M君の発言では、今までのH. Rは偽善であり、自分達の本心とは関係がないという。たった今の議論は本心であるとも言ふ、主体性を回復し、利益を保証しようという。みんな賛成した。利益とは何か、A君は真実の話し合いだというのが、B君は、クラブ活動を保証することだという。C君はH. Rなんて止めちまって、受験勉強をするという。そうして、こんな話し合いは5分でピシャリと終わってしまうという。また、こういうH. Rをみんなでヤル気になって態度で示そうという、担任は、今の君達の話もまた仮りのものと思えない、君達がどうやって主体性のあるH. Rを運営するか、どうやってみんなの利益を見つけ出すのか、その具体的な方策を明らかにして欲しい。

生徒達は、何一つ答えなかった。偽善とは何か、仮りのものとは何か、など適当に論点をすりかえた返事が返って来ただけであった。

しかも、帰校後、この事件の顛末はゆがめられた形で広まった。簡単に評価が下された。しかし、その安易な評価は、見通しを欠いた評価の態度にこそふさわしかった。C組がH. Rとして発展していったことは、総括でのべる。

16. 総 括

前年度のホーム・ルーム研究委員会で、われわれが考えた指導目標は、①生徒の主体性の強化、②生徒の連帯性の強化、③集団としてのまとまりを持たせる、④自主規律をもたせる、4つに集約されている。それを、本年は担任として年間のH. R活動の展開の中で、常に考えていくのであるが、とりわけ、1学期の校外指導「H. Rづくり」と2学期の文化祭の準備に焦点を合せて考えている。自主性・主体性とか、集団としてのまとまりと言っても、それは生徒あるいは生徒集団が、何かに取り組むことなしに作られるものではない。その意味で、行事を重視している。しかし、ともすれば、それらの行事そのものの成功だけを狙いとしやすいが、問題は行事そのものの成功・不成功にあるのではなく、それに取り組むことによって、生徒集団とその個々がどう変革して行くかということである。

D組のH. Rの「組織づくり」の中では、特に「内組」・「外組」の問題を重視した。班活は、この特殊な問題のために考えたわけではないが、この特殊な問題を当面の課題とすることで、班活への関心とエネルギーを引き出そうと考えた。「内・外」の問題は「外組は要求する！」に、かなり具体的にのべた積りであるが、無論、問題そのものは、依然解決し得ない部分を沢山

残している。H. Rが何かの問題に当面する度に、半数余りの生徒達の共通の経験が一つの力であることはやむを得ないが、この頃では、それをむき出しにすることはなくなり、ていねいに話し合う傾向が出て来たことは、前進である。「内・外」の問題は、H. Rだけでなく教科やクラブ指導でも多くの問題を提起しているが、それをもっと具体的に明かにしていく必要がある。とくに、本校では中学校の学級増で、高校の「外組」が減少していくことを考えると、この問題への関心を新しくしておくことが、肝要である。

H. Rの組織化を考え、何かと取り組むことを考えさせようとする教師の前でも、大部分の生徒は無気力であり、無関心であり、生き生きと若者らしく振舞うことはまれである。だからこそ、教師は何かをさせ、何かを考えさせ、それによって変革を迫る。これは厳しい要求でなければならない。教師の「自主性」という言葉を借りて、教師の指導性へ挑戦する。それは場合によっては、教師の要求から逃避しようとする生徒の狡猾な口実である。仮にその事態が、かなりはつきりしていても、そういう決めつけで生徒が人間として生長するとは限らない。われわれ教師の考え方の中にも、生徒の自主性と教師の指導性を対立的にとらえる考えが十分に克服されているわけでもない。教師が、極端に指導性を萎縮させた状態の中で、生徒が充実した活動をなし得たとすれば、その教育不在の構造を見きわめることによって生徒達が自分達の状況を知り、それを危機として適確にとらえたことが、出発点になっているか、教師の指導性そのものが全く生徒達に信頼されていない場合である。

教師の指導性への挑戦を、担任は主体性の自覚の最初の段階と考えることにした。また、自分自身の中に克服しきれない管理主義的な教育を彼らの批判の前に晒すことで、自分の教師としての成長をも考えていた。

所で、「無関心」や「無気力」を問題にした時期は、やや早過ぎたと思う。2学期になっても「無関心」「無気力」はしばしば平然と、白昼のH. Rに登場する。一度や二度徹底的に話し合うことで解決するほど根の浅い問題ではない。最近、文化祭を準備していく中で、二つの班が班会議をサボってしまった。H. R総会は、問題をあとまわしにしようとしたが、担任は二つの班への追求を要求した。班会議を開かなかった理由は、大体「ヤル気のなさ」であった。しかし、ここでは問題は何一つ解決しない。何故「ヤル気がなくなったか？」という問いに先ず答えなければならない。「ヤル気のない」「無気力」も、一つの要求の表現であるという。しかし、何も求めないこと、実態のある言葉で何一つ言えないことは、生きていないことと同じである。ただ、自分を少しでも外に出すことが出来ない程、悪い状況があるとすれば別であるが。そこで担任も自己批判をはじめた。「僕も、1学期に班活を要求したことで、言いかえれば、諸君が文化祭に取り組む組織を持っているということを口実に、文化祭の準備を軽視していた……」それでも、彼らは自分達の「ヤル気のなさ」を説明しなかった。しかし、次の日始業1時間前に開いたH. Rには、殆ど全員が出席した。

「無関心」「相互不信」は、もっとひどい状態にしたまま、したがって、自分達で何一つまとまったことができない状態にしておくことが、必要であったかもしれない。H. Rの大多数が、何とかしなければと考えるようになるまで——しかし、それでうまく行くという見通しはなかった。

「合班」——合同班長会議は、四つのH. Rが共同で行事の計画をつくり、運営するという目的で作られただけではない。大きな狙いの一つは、H. R間の交流である。合班の初期の段階で、D組は討議の遅れや組織活動の不充分さなど、多くの点を合班から学びとった。しかし、後半ではD組の活動が、合班をリードすることが多かった。一つのH. Rだけでは、迷路にふみこむような事態も、合班で救われることが多かったにちがいない。結果の是非は別として、「C組

と合班の話し合い」は、こうした生徒組織の意義を考える上で重要である。

もっとも、初めの頃の合班にはH. R間の対抗意識が根底にあって、それがH. Rのエネルギーを引き出す役割を果たしていた。だから、指導にあたっては、対抗意識を最初から否定してしまうのではなく、徐々に、合班のメンバーがH. R、班の活動家として力をつけて行くのをみながら、対抗意識を「援助」におきかえるよう指導することに努めた。

合班の目標決定までの手続きは、ここには詳述しなかったがやや巧妙に過ぎる運び方があった。班活を基盤として班長会議→合班と討議していても、かなり高い「目標」を全体から引き出すことは困難である。多数を獲得するために、最初、莫然とした決定をし、少しずつ内容を固め、高い提案に替えて行ったのであるが、それだけに、行事にかかる前に準備段階の総括として「目標」について全討議を振り返えるようなH. R総会が必要であった。

合班を中心とした組織づくりという点では、この段階では急ぎすぎるきらいはあるが、生徒会との関連が弱かった。目標や計画を検討する段階で、昨年のように、上級生の経験が伝えられれば、学年行事の殻の中でも上位集団への指向がもっと強く意識されたにちがいない。

「自主規律」は集団の中に、共通の目的を欠いてはなりたたない。生徒達が決定した7項目は、ありきたりのことで、こんなことを決めるのに何時間も、大勢の生徒が討論するなど首をかしげればそれまでであるが、「規律」は、本来その集団の状況を反映するものであって、集団の状況に無関係な規律は無意味である。また「自主規律」が「自主」であるためには、規律の目的と点検が生徒達のもでなければならぬ。

この実践では、「規律」の運営もまた合班の仕事であった。それは、「自主規律」の訓練の少ない生徒集団の中では、班長たちの負担を大きくした。

現地での活動は、概ね満足できる結果と考えている。しかし、例えばH. R討論に時間がかかり過ぎたことは、その前の段階——班討論が不充分で、班内で細分し、対立したままの意見が、H. R総会で、前のままの形で繰り返しのべられたことに起因している。ただ、そのような討議のまずさを経ないで、班討論が完成されることはあり得ない。長い、面倒な経験を通して、班活の意義を、技術を学ばせることが必要である。

往復の東京——妙高高原の長い距離をバスで旅行することには、いろいろ疑問があった。第一に危険性についての危惧であり、第二に疲労、第三に車中の時間を有効に使うことが出来るかどうかということである。第三の点については、予め、交通委員会の生徒達によって、車中のゲーム、歌などが準備されていて、往路はそれが役に立った。帰路は、討議しつくされずに終わった問題について、H. Rごとの熱心な討論が行なわれた。これはバスを利用することに決めた時に予期しなかった成果である。

「C組のクーデター」事件は、このような成果の一つである。この事件は、帰校後、校内はもちろん、父兄の関心までひいたが、それらは、大体において教師の指導性に対する疑念だったと思う。しかし、担任教官も合班指導教官もそのようには考えなかった。むしろ、この事件をテコに使うことで、H. Rづくりは急速に進むと考えていた。しかし、反発した生徒達は、担任の要求に言葉では何一つ応えなかった。6月に入って合唱コンクールが開かれたが、C組は三位に入賞した。H. Rの殆ど全員が、毎朝1時間も早く登校し懸命に練習した成果であった。文化祭にも着実に取り組みつつある。担任の指導性に対する疑念も今はなくなった。D組の「無関心分子との斗争」もトラブルである。2学期になっての「ヤル気のなさ」をめぐる議論も、いわばトラブルである。いろんな矛盾を露呈させ、それに取り組ませることなしに、生徒達の集団を成長させることは出来ないと考えている。

「車中のクーデター」は、もう一つの問題をわれわれに考えさせる。それはリーダーの浮き上

りである。この事件の直接の契機は、合班一担任の線にもっとも近い班長による自己批判であった。恐らく彼は、担任の要求に応えるべく、自らの弱点を最初に吐露しようとしたのだが、これが反対の引き金になった。反合班派の生徒の眼には、彼の言動は「イヌ」に見えたのである。この事件の後、「イヌ」の扱い方について真剣に検討した。所でこの「イヌ」は、教師＝権力者に追従するいわゆる「イヌ」とは全くちがひ、自分たちの置かれた状況に不満を持ち、それを積極的に改善しようとする活動家であった。ただそれが、現実に対し悲観的で、何もしようとしなない大部分の生徒達の眼には、教師の意図の受け売りに見えるのである。われわれは、このような「イヌ」を大量に作らなければならない。しかも「イヌ」というレッテルを貼られた瞬間、彼はH. Rへの影響力を大幅に失う危険がある。われわれの検討の結果は、B組のKという活動家の中に集約された。彼は、教師側の意図を知り尽し、自分自身で賛成しても、それを絶対表面には出さない。むしろ、しばしば教師の指導に反抗することで、教師の指導を逆説的に証明する役割をも進んで演ずることが出来る。H. Rのみんなが教師の指導を理解しはじめた頃、彼は口惜しそうに自分の主張をおろすというような活動家である。では、Kはどうしてこのような活動家として成長したか。われわれも充分理解し得ないが、中学時代の学級代表としての活動の中で、鍛えられたことは確かである。またこの時期に彼は、社会への関心も高まり、多くの書物を読んだ。その中には、様々のH. R指導の書物もあった。

高原生活H. Rづくりを目的とした校外指導を準備し、実施する段階までのいくつかの問題を拾ってみたが、最後に、それ以後の経過と展望を簡単にまとめよう。

合唱コンクール後に、合班が開かれる予定であった。Kを中心に、行事の総括を生徒の活動家達が考えていたが、実現しなかった。試験が近づいていたことも彼らをやりにくくしていたし、彼ら自身、次の仕事への取り組みに忙しかった。また、教師側も生徒の組織が動くことを期待して、「指導性」が後退していた。

今は文化祭の準備に追われていて。文化祭実行委員会は、クラスデコを班活で進めることを決めた。高一は全体的にみて、もっとも班活が活かされている。われわれはこの行事を通して、H. Rを生徒会に指向させようと考えている。

D組は、先にも触れたように、再び体制の立直しに忙しい。同じことのくり返しに似て、しかし着実に前進している筈である。

われわれ教師の課題は、行事を成功させることではなく、その指導を通して、生徒個々とその集団を確実に変革していくことである。目標の4項目に向って。

昭和43年度生徒会指導の記録

本年度は、前年度のいきさつから、特活指導係として自治会の直接指導にあたる ことになった。

1. 生徒自治会指導の目標

そのねらいを一言でいえば、自分たちの学校生活を歪める教育状態にたいして、斗っていく力量をもった生徒を育てることである。その力量とは、生徒が①主体性を持ち、②連帯感をもっていることであり、生徒集団が、③集団としてのまとまりをもち、④自主規律をもっていることである。

2. 生徒部との関係

指導の成果を高めるためには、教師集団の統一的な取組みが必要である。特活係は、上記の目標や指導方法を盛りこんだ「特活係指導方針案」を管理職・生徒部に提示した。(従来、こういう慣習はなかった)本校の通弊といおうか、トント音沙汰がなかった。生徒部内討議を要求した

が、会合の延期が続いて、しまいには闇に消えた。反対の声はなく、係は暗黙の了解と判断することにした。

本校の現状には、生徒指導上の統一方針はもちろん、そのための共通のことばもない。それゆえ、討議だけによって共通の理解に到達するのは困難と考えて、それ以上の要求は出さなかった。つまり、実践で成果をあげ、それを共通理解のための手がかりによろうとしたのである。

3. 「H. Rづくり」への着手

新学期初めの役員会の仕事は、新入生歓迎オリエンテーションと二年、三年のH. Rへの働きかけであった。前者は、生徒自治会主催の恒例の行事であり、後者は、学校に要求して認められたいわば「自分たちのH. R」であった。これらの準備を、前学期のうちに整えておかなかった役員会（任期は11月中旬から5月初旬まで）は、係顧問にその不備をつかれて、短期間のうちに仕上げなければならなくなった。集中的な討論の末にできあがった新入生へのアピールは『すばらしき高校生活を築くために』と題されていた。そこには、かれらのとらえた高校生活の危機が表明されていた。

そのなかのH. Rの項

〔1〕ホーム・ルーム

目的 (1) 批判と援助によって相互の連帯感を高める。

(2) 集団と個人が互いに尊重しあう態度を身につける。

(3) 正しい世界観・人生観を身につけ、自分たちがおかれた立場を理解し、自分で考え自分で行動できるようにする。

(4) 日常生活の不満を要求に高め、解決していく。

現状 (1) 個人個人が閉鎖的で何事にも無関心。

(2) 教師に放り出された「ぬるま湯」に甘んじている。

(3) 集団としてもバラバラで、相互に不信感がある。

原因 日本の社会体制から出てくる受験という生存競争、そこから派生するゆがめられた教育、それらによって高校生は互いにバラバラに切離され、特定のこと以外に無関心になることを余儀なくされている。

表現力の不足と時間的制約とから、その主張は充分明確ではないが、しかし、自分たちの状況をかなり適確にとらえていることがわかる。

また、二、三年生向けの『H. R討論のために』の中には、「昨年度のH. R活動の総括と今年度H. Rの活動方針とを、改正された会則の精神を実現する観点から討議すること」が強調されている。そして、次の点に討論が集中するように意図されていた。

改正会則の精神を実現するために

1. H. R活動の目標をつくろう

2. 目標達成のため、班活動を利用しよう

3. 規律をつくっていこう

以上のような討議内容の準備をし、さらに役員を中心にした生徒たちが、各H. Rでリーダー

シップをとる（役員会を除けば、諸々の委員はまだ選出されていない初期のH. Rなので）手はずも整えて4月12日を迎えた。印刷物は全生徒に渡された。

役員会のこの働きかけは、新入生にたいしては一応の成功をみた。かれらにたいする役員会の要求が、高一担任団の要求と一致していたことによる共感が大きな要因であった。しかし、二年・三年のH. Rでは、役員会の要求は殆ど無視されてしまった。

予定通り事を運べなくなった理由を、役員たちは次のようにとらえた。殆どのH. Rでは、委員の選出など、気軽にできるものから手をつけ、しかもその選出に多大の時間を費したので、討議すべき中心議題には申しわけ程度の時間が残されただけだった。この順序の逆転と時間の無駄使いがガンであったが、それは、多くのH. R員が、役員会の努力で獲得したH. Rに特別の意義を付与していなかったこと。また、役員会の要請を自分たちの代表たちからの要請だとは受けとらず、活動屋の勝手な注文だと感じていることに原因があった。さらに、希望も新たな新学期初めであるにもかかわらず、思ったより受験による重圧がひどく、自分を拘束するそんな重苦しく面倒なことはやる気がしないという雰囲気、すでに醸成されていることにあったこと。

予期した以上のこの非協力の大勢に、各H. Rに散った役員たちは抗うことができず、おし流されてしまったというわけである。しかし、原因はそれだけにとどまるものではなかった。

役員＝リーダーとしての立場を堅持することや、委員の選出などのこまかい仕事は後にまわして、根本方針に取組ませることをあっさりあきらめたかれら自身の弱さも問題であった。そうした活動に充分なれているとはいえない役員たちに、予想されるいくつかの障害とそれをのりきることの重性を明示しておかた顧問の指導にも、問題はあったろう。しかし、一層問題なのは、担任教師の姿勢である。生徒が自分たちできめていけば、それでことがすむと受けとってしまうようなその発想法である。根本方針の議論の前に、雑用でもすますかのように委員の選出をするのを、許してしまったことは、まさしく自由放任主義的指導の典型であろう。

4. 細則への取組み

第二週目から、役員会は会則の改正に伴う諸々の細則の改正にたずさわった。議事運営規約、選挙管理規約、会計事務規約、諸委員会規約など、どれも早急に仕上げなければならぬものばかりであった。

役員会はこの細則づくりに追われ、代議員会もこの仕事だけに、しかも多くの時間を費さなければならなかった。さらに、5月初旬の役員改選前に、決算と予算も仕上げておかねばならなかった。役員や代議員にとって、条文なおしや金の配分などの仕事は、全生徒やH. Rを代表して皆のために働いているという実感を伴わなかったし、よくやってくれたと評価されるものでもなかった。それは正義感のわかれ、たいした成功感も期待できない、できることなら避けたい、めんどろな仕事であった。

代議員たちは次々とサボり出した。定足数すれすれの成立と流会とが続いた。議長団は生徒自治会の掲示板に欠席を公表したが、だんだんききめがなくなっていった。役員会によるH. Rへの訴えも、例年のように効果がなかった。

ただ、一年のひとクラスで、サボった代表にたいする責任の追求と援助が真剣に行われただけだった。担任が疑問を感じないのか、あるいはあきらめている殆どのクラスでは、代議員の怠慢を知りながら生徒たちは、その問題に触れたがらなかった。多くの生徒は自分自身、別の委員会などで代議員同様、すねに傷もつ身であり、うしろめたくて追求などやる気になれなかった。うっかりやれば、逆に追求されるはめに陥る。こうした怖れと怠惰の気楽さから、かれらは問題を避けて通った。

民主集中の原理を実現する制度はつくったが、その原理が目の前でふみにじられても、それを

追求する力量をH. R各集団はもっていなかった。

多大な時間を費して代議員の多くが確認したことは、またもや、従来と同様、代表であることむなしさであった。

自分自身、やりがいを見いだすことができずに細則に取り組んでいた役員たちは、このような状態の進行のなかで、リーダーシップのとり方に誤りがあったことに気づいた。そこでまず、代議員会の中に小委員会を作って事態の改善を試みたが、期待したほどの効果もなかった。最後に、役員たちは、代議員会をもっと生き生きとしたものにするには、細則や予算よりはもっと身近で、正義感に訴えるような仕事、つまり学校生活の中から出てくる不満や要求を掘起こして集約するような活動を欠いてはならぬことを確認した。しかし、多すぎる仕事をかかえていて、しかも、任期終了もまじかに迫っていたので、現実には代議員会に活を入れることはできなかった。

したがって、代議員会をパイプとする役員会とH. Rとの民主集中的な組織活動は現実化せず、学期初めにかれらが目ざした「集団の力」も「自主規律」もH. Rにはつくり出せなかった。

これらの失敗のうらには、かれらのエネルギーの細則への全面的投入をコントロールしえなかった顧問の指導の弱さもあった。細則作成のための専門委員会などをつくって、かれらの仕事を緩和させておかなかったのは、誤りであった。

しかし、当初、H. Rにたいして改正会則の精神の実現を訴えた役員会が、この期間にそれを忘れ去ってしまったわけではなかった。

5. 委員会への取組み

役員会は改正会則の精神——組織活動の強化による民主集中制の確立——を図書・視聴覚・保健などの常任委員会、運動・学芸委員会・文化祭・体育祭・音楽祭などの実行委員会、H. R委員会、週番などの機関で具体化しようとした。役員一人一人は、それらの委員会を分担して、役員会と各委員会との関係を強化しようとした。

しかし、役員の実動人員の少なさに比べ、委員会の数が多すぎることで、また細則などの過剰な仕事をかかえこんでいたため、そのねらいを生かすことがむずかしかった。時間の制約から、各委員会の活動を報告しあうことは、散発的にしか行えなかったし、各委員会にたいしてリーダーシップをとっていくことは、役員会全体としても個人としても、充分準備できなかった。したがって、当初の精神に近づこうとする活動が行なわれたのは、特に役員会が重視した委員会と、特に力量のある役員が派遣されたところや、意欲のある委員のいる委員会だけであった。

① 文化祭実行委員会

各H. Rから出て来た文実委員の中には、役員会OBの三年生たちがいた。班活動指導を経験している教師を含む文実の顧問の下で、かれらや役員たちのリーダーシップが発揮され、文実はず、文化祭の意義づくりに取り組んだ。従前の文実は、意義づくりを目的意識的におしすすめたことはなかった。このことと、「おしつけられた選出」とか、かれらの誇りのなさの要因であった。実行委員の中には、自分たちはH. Rやクラブの活動の調整役・雑役夫であると卑下している者さえいた。こうした従来からの雰囲気の中に、自分たちのおかれた現状に対決してこうという主張が対置され、それをめぐって長い討議が行なわれた。

後に、文化祭の意義は次のようにまとめられた。「文化祭を、個人が集団の中での個人の果たすべき役割をつかみ、集団に積極的に働きかけることによって集団を高めていく場にする。それによってこそ、個人の向上が保証される」

それは、仲間やH. Rの問題から逃避していく風潮を危機ととらえた生徒たちが、それに取組むための根本的な姿勢を示していた。

しかし、この意義は文実委員にまで内面化されたわけではなかった。欠席をくりかえす委員ほどそれは不十分であった。だから、文実がH. Rにその意義の承認を求めたとき、あるはずの拒否がなかった。責任を感じない、安請合いをしたのだから、いつそれをひっくりかえそうとかまわないというわけだ。ここでも、生徒大衆は動かなかったが、リーダーグループの拡大が行われた。

② H. R委員会

H. R委員会は、改正会則の中核をなす機関であった。それはH. R活動の経験を蓄積し、各H. R間の経験を交流する場であり、個人と各H. Rの要求を集約して役員会に反映させ、週番とともに自主規律をつくりだしていく役目を担っていた。

役員会はH. R委員会にたいし、それらの仕事を遂行していく土台として各H. Rで、班の活動を盛んにするよう要求した。一年生は、その時、担任団の指導の下で班活動を経験していたので、特別の疑問もなく同意した。しかし、中心的学年である二年生の委員は、班の活動はむしろ、学校生活を重苦しくするものという感覚を強くもっていて、疑念を出した。が、それにかわる活動のスタイルを対置することはできなかった。三年生の委員は、学校生活の荒廃に集団的に取組もうとするそのような正攻法は、自分たちにはもう通用しなくなっていると、苦痛にみちた発言をした。つまり、仲間に状況の危機とそれへの対決の必要を訴えれば訴えるほど、あきらめている者たちの一層の離反と無気力な沈黙が深まる。そのことが、まだ意欲を残している者にさえ、やる気をなくさせてしまう結果を招くだけだと主張した。そして、当面、スモール・グループを活用して、やれる者からやれる問題でやるしかないといった。

H. R委員の中には、そのような集団的な活動の必要を全然認めない者もいた。かれらは、自分たちの学校生活の現状にとくに危機など感じていなかった。その一部は、生徒個々人が相互に孤立していて、まとまりのないH. Rであることは認めたが、それは永遠普遍の人間性であって、それを変革することなど不可能だと考えていた。また、他の者たちは——委員をおしつけられた者はとくにそうだったが——「無気力」も「相互不信」も認めなかった。

そこから、危機とは一体どのような実態を指すのか、改めて論ぜられることになった。ある教科の時間に行なった。高二生徒たちの『いま、かかえている問題(=悩み)の調査』などが引合に出され、「本心を語れる友がいない」「クラブ活動・生徒会活動・社会的問題への参加が、受験勉強からくる不安でだんだんやれなくなってきた」等の事実が、自分たち全体に共通する現状として確かめられた。しかし、「解決不可能」論は根強く残った。

委員会としては、結局、班の活動は大事にしていこうという大勢になったが、その班活のイメージは各人異っていて、規律や相互批判のある班活には、ほど遠いものであった。

一応承認された班活は、しかし、H. Rにもどして全員で討論するという方向をとることはできなかった。二年生・三年生の委員たちは、それをおろせば公然たる否決になるにきまっている、と考えていたからである。では、「相互批判などやれる土台はない」「規律は自由の否定である」という意見がまかり通ることを、かれらはいやというほど思い知らされていた。

かくしてH. R委員会は、全体として明確で公然たる立場を主張しえぬ存在であった。結局、一年生は担任団の指導の下で進行している班活を推進してみる。二年生は、まず旅行委員に校外活動で班を活用するよう働きかけてみる。三年生は、当面、とりあえずスモール・グループ政策を認めることに決った。

二年・三年のリーダーたちは、H. Rの無気力の壁の厚さを打破る見通しに確信をもつことはできなかった。後に、校外活動が終って開かれたH. R委員会では、二年生の委員の多くが壁の重みにうちひしがれて、すっかりやる気をなくしてしまっていた。かれらは、取組むこと

の困難さに圧倒されて、取組まないうちから挫折してしまった。かれらが旅行で、自分の仲間たちの中に見出したものは、現実逃避のすさまじいまでの欲求であった。「危機への対決」などは、ひとたまりもなくはねかえされてしまう現実であった。

二年生が、活動の中核をなしていたため、期待されていたH. R委員会は、以降、すっかり沈滞してしまった。委員長のイスも一年生に明渡された。

この頃、改選されたばかりの次期役員たちには、これらの二年生を支える力はなかった。

この時点では、H. R委員会は「経験の交流」から、活用できる活動スタイルを見出すことはできなかった。一年生についていえば、班活をやりはじめたばかりであって、まだ成果が確認されたわけではなく、したがって感覚的疑念を持ったままであったこと。二年・三年のリーダーたちも、H. R全体を盛りあげる活動に成功した経験はなかった。取組んで、むしろ苦杯をなめたことの方が多かった。また、二年・三年の委員からは、担任の指導の方向も熱意も、まるで伝わって来なかった。

この沈滞状態のため、H. R委員会は要求を集約するどころではなく、まして自主規律などつくれるはずはなかった。

顧問の指導の問題点としては、委員たちの承認しうる線で、決定を明確にさせることと、決定の遂行を点検することを、かれらに徹底して要求していなかった点にあった。

二年の班活については、この時期で取組みが可能な「校外指導」の活用をはかる必要があったが、この行事の直接指導は担任団と行事関係であって、H. R委員会顧問団の仕事ではなかった。

もっとも取組みの必要な三年生には、取組みの素材を見出せなかった。

6. 役員改選

5月初旬の役員改選がま近に迫っていた。従来と同様、立候補者が自然発生的に出揃う見込みがないので、役員自身で候補者さがし、くどき落しの工作にかからねばならなかった。しかし、その必要を理解しながら、ひきつづく細則のために効果的な働きかけができなかった。受け付け締切りになっても半数しか出ず、後に、補充選挙でやっと定員を確保する有様であった。

さらにひどいことには、新役員の中には経験者が一人しかおらず、殆どの役員は改正会則の精神がなんであるのか、前期の役員会がなにをやるうとしていたかも知らなかった。立会演説における公約の力点は、内容をぬきにした「コミュニケーションの確立」だけであった。教育状況の認識があまりに弱く、また諸組織への働きかけの経験ももっていなかった。

しかし、生徒総会における役員会OBらによる厳しいつきあげと、役員会ひきつぎ時の「次期役員会への要望」とによって、かれらは反撥を感じながらも自己の不充分さを認めざるをえなかった。後に、OBの援助を受けながら、学習会を開いて力量を育てていったが、この弱さは生徒会活動にとって大きな障害となった。このことは、インフォーマルな形ではあれ、役員候補者を育てておくことの重要性を確認させる。

新期役員会は、H. R委員会や代議員会にたいして、リーダーシップをとる内面的な自信はもてなかった。

それでも、かれらは残りの細則類に取組んで、多くのエネルギーを費した。連日のように夜遅くまでの「雑務」がつづいた。

できあがった細則案を次々と代議員会へ送った。代議員会における「やりたくない努力」を実際に目にした新役員たちは、そこに「正義の灯」をつけようとした。活動方針の作成に取組み、活動方針案に学校生活の危機的現状とその原因と、そして自分たちの任務を盛りこんで、代議員会にはかった。

しかし、細部だけをつつく代議員、無関心な代議員たちによって、ついに真剣に取上げ、討論されることなく、マアよかろうという具合に、活動方針は可決された。役員会は活動方針を印刷したものをH. R. に配布して、討議するよう要請したが、代議員たちのなかには説明役も果さず、結局、多くのH. R. ではあいまいに扱われ、直接自分と関係ないひとつの見解として無視された。役員会は、代表としての自分たちのやり方がまともに受けとられなくても、自分を選んだ者たちを追求できなかった。無視を許さぬ強姿勢をとる力量はなかった。

一般の生徒たちのそうした態度の背後に、当然あるはずの様々な指導は問題にされなければならぬまい。予備校入学をすすめるような姿勢が大きな影響を与えている。

顧問団は、そうした教師集団の動きを明確にはつかめなかったし、また、担任団との協力体制を可能にすることもできなかった。

自由放任主義的指導が揺らぎ出した点はまだ見出せない。

III 総括

われわれの主題は、『H. R. と生徒会の関係強化によるH. R. 指導の実践研究』である。われわれは、単にこの特別教育活動の二つの場を結合させること、或はそれによって特別教育活動そのものを活発化させることを企図したものではない。

われわれが、この主題を設定したのは、今日の教育の中で、生徒達の人間性にみられるゆがみを危機的にとらえたからである。そして、そのような生徒達の人間性のゆがみの多くは、受験をはじめ、今日の内外に起因する教育のゆがみに対応している。したがって、生徒達の人間性にみられるゆがみに取組むとき、われわれは自分自身のゆがみに絶えず直面しなければならなかった。

とりわけ、今日の高校教育で教科指導の重要性は大きい。したがって、教科指導の場で受験による矮小化をはね返すことが重要である。それにもかかわらず、われわれが特別教育活動の重要性を強調するのは、いわゆる受験校においては、放置すれば生徒もわれわれも今日の教育の現状に自分達の存在を意義づけるような構造があって、受験に関係のない特別教育活動の意義は認めるとしても、その指導は実際上軽視するようなわれわれの弱点があるからでもある。

この実践の過程には、二つの段階がある。一つは、H. R. 生徒会それぞれの組織づくりである。いま一つは、それぞれの組織が絡み合って、活動していくことにより、それぞれの活動が充実していく時期である。この報告は、概ね、最初の段階に当たるが、われわれはい応の成果をあげたと考えている。

最近の生徒達の動きの一端を報告して、われわれの次の段階の展望にかえる。

9月に入って、文実の文化祭への取組みが本格化した。かれらは、プログラムづくりから見学順路のことまでまかされて多忙となった。そのため委員は、各H. R. の進行を点検するいとまもなかった。進行は遅れ、「文化祭なんかやったってしょうがない」という雰囲気さえあった。

「班活」の問題で低迷が続いていたH. R. 委員会は、なんとか活路をみつけようと苦心していた。かれらは思いついた。「文化祭への取組みを班活で！」H. R. 員委たちは、各H. R. の取組みが、「全員参加」にも「一人一人が取組む」にも「なかまと団結して取組む」にもなっていないことを、例年のようにあたりまえのこと、として見過してはしまわなかった。かれらには、それを危機としてとりあげる目がすでにできていた。

夏休み中に、何度も学習会をひらいて来た役員たちは、このH. R. 委の動きを積極的に、支持した。

文実の事務的な仕事が一段落つくと、文実・H. R. 委・役員会の三機関が一体となって、「文化祭を成功させよう！」のかけ声で、各H. R. への取組みをはじめた。かれらは、三者合同会議

で、次のようなプリントを配って、文化祭の進行状況を点検しはじめた。

年 組	現 状 分 析			対 策
	組 織 の 状 態	問 題 点	意義達成の見通し	
1 A				
1 B				
1 C				
1 D				
2 A				
・				
・				

役員会が春にまいた「全校的な組織活動」の種が、秋になって芽ばえて来ている。

秋は、本校の教育実習期でもあった。実習が二週目に入った時、三年生の有志たちは教生に呼びかけた。「僕たちになにを教えたいのか」と。

話し合いの場がもたれた。第一回目。

高三：「先生方は高三のとき、受験にどう取組んだのですか？」

教生：「……」

高三：「H. Rをどんなふうに運営したのですか？」「未来の先生として、これから、どんなふうに指導していこうと考えていますか？」

教生：「……」

「われわれは教科指導に力を入れて来たのだから、教科指導のことを問題にしよう」

高三：「教科指導では教科によって内容・方法が異なる。生活指導で話し合いたい」

教生：「生活指導？」

「何を教えるかが問題だ。それを、授業で勝負するのだ」

高三：「勝負は授業の面だけでなく、生活指導の面でもやらなければならないはずだ。僕たちがこうむっている問題は、授業だけでは解決しない」

第 二 回

高三：「前回の話し合いを総括したものを僕たちは出します。先生方のも出して下さい」

教生：「……」

高三：「僕たちがかかえている問題とそれに対決していくための生活指導とを理解して下さったのなら、お願いしたいことがあります。大学に、この問題を研究するサークルを作ってほしい。できれば、そういう自主講座をつくる運動をやっていただきたい」

これに応えた教生たちは、次のようなアンケートを70人の仲間たちに配った。

私達は、もうあと数日で教育実習を終えようとしています。

ここにあって思うことは、私達は、一体この実習で何を学んだのか、また何の為にこの実習を行ってきたのであろうか、ということです。

そこで、教育実習の意義をどこに求め、どのような態度で臨んだのかを反省し、今後教師として、あるいは教師以外の職業についても、この貴重な経験を長く生かしていくために、さらには来年駒場校を訪れるであろう次期教生の人に、より突り多い教育実習を行ってもらい、教育に対する関心を高めてもらう一助となるように、私達教生の駒場での三週間を、何らかの形でまとめてみようではありませんか。

1. あなたは教員になりたいと思いますか。
 - a 実習前は教員になりたいと思っていたが、今はなりたいたと思わない。
 - b 実習前は教員になるつもりはなかったが、今はなりたいたと思う。
 - c 実習前も今も教員になるつもりはない。
 - d 実習前も今も教員になりたいと思っている。
2. あなたは教育実習に何を期待しましたか。（目標に何をおいたか）
3. あなたは教育実習で何を得ましたか。
4. あなたが教育実習中に感じた不満・問題点を簡条書きにして下さい。
5. 付属駒場を他校とくらべて良いと思うところ、悪いと思うところを書いて下さい。

	学 校 に つ い て	生 徒 に つ い て
良 い 点		
悪 い 点		

6. あなたが、この実習を通じて生徒に与えることが出来たと思うものがあったら書いて下さい。
7. あなたは、生徒が私達実習生に対して、何を求めていたと思いますか。
 去る21日（土曜日）放課後、高校生有志の人たちの呼びかけで、教生と高校生の話し合いの場がもたれました。
8. この会合があることを御存知でしたか。
 - a 知っていた
 - b 知らなかった
 （前問でaと答えた方は）この会合に出席しようと思いましたが。
 - イ 出席した
 - ロ 出席したいと思ったが、都合で出席出来なかった
 - ハ 出席しようと思わなかった
9. この話し合いを通じて、高校生の側から、生活指導に対する教生の関心の低さ（認識の薄さ）が指摘され、参加した教生はそのことにより、生徒がそれぞれ多くの問題を抱えており、それを生徒全体の共通の問題として、積極的に対処しつつも、他方では先生方の積極的な生活指導推進に期待をもっていることを知りました。
 ところで、あなたは生活指導とはどのような内容をもつものであり、〵教育〵の中にどう位置づけられるものであると思いますか。
10. あなたは、この実習を通じて、生徒が学校でどんな問題を抱えているか、気付いた点をあげて下さい。
 どうも有難うございました。

最後に、あなたの性別（・男女）、実習校（中学・高校）を。

※このアンケートは教生離任式（28日昼休み）に回収したいと思いますので、宜しく御協力下

さい。

尚、この結果は、なるべく早急にまとめて御渡ししたいと思います。

以上 教生有志

連絡、その他不明な点は〇〇、〇〇にお尋ね下さい。

あとがき

生徒達がそうであるように、われわれ教師も「取り組む」ことで学ぶ。この拙ない実践研究は、文字通りわれわれの学習の記録である。

われわれに関する限り、学習の成果は決して充分ではない。とくに、「教育のゆがみ」を問題にするとき、そうである。しかし、成果が充分でないことが、われわれを次の「取り組み」に駆り立てる。

教師の生き甲斐もまた若い生徒達のそれに似ていることである。